

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：監督とその資格④  
聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章2節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

今朝、皆さんと続けて見ていきたいみことばは、テモテへの手紙第一3章です。聖書をお持ちの方はどうぞお聞きください。ここ数週間にわたって、私たちはこの手紙から、「霊的リーダーのあるべき姿」について考えてきました。もしかしたら、このみことばを見るのが初めての方もおられるかもしれないので、今一度、歴史的な背景を思い返してみてください。

この手紙は、パウロから彼の愛する弟子テモテに宛て記されたものでした。そのテモテは大きな責任を負っていました。どのような責任だったかといえば、マケドニアへと出発していくパウロに代わって、テモテがエペソの町に留まり、教会に起こっている問題を解決するというものでした。テモテは、エペソの兄弟姉妹がみことばに沿った教会生活を送ることができるように教え、守り、導いていくという責任を負っていたのです。しかしそれは簡単な仕事ではありませんでした。この時、エペソの教会の中には、聖書とは違った教えをする偽りの教師たちが入り込み、人々の間に混乱をもたらしていました。彼らは高慢で、みことばに素直に耳を傾けようともせず、人々をねたんだり、そしったりして、絶えず争いを引き起こしていました。正しい道から逸れた偽りのリーダーたちによって、教会が苦しんでいたのです。だからこそ、その現状を把握していたパウロは、テモテに言います。「あなたは町に残って、偽りの教えをしている者たちを黙らせなさい。また人々がそんな間違った教えに耳を傾け、心を奪われることがないように教えなさい。」と。こうして簡単ではない、非常に厳しく大変な働きがテモテを待ち受けていました。でも、パウロはただやるべきことだけをテモテに命じ、放りっぱなしにしたわけではありません。テモテを愛していたパウロは同時に、彼に励ましを与え、問題を抱えた教会の中でどのように振る舞うべきなのか、その具体的な指令をこの手紙の中に書き記していたのです。そしてその一つが、今私たちの学んでいるこの3章でした。

パウロはこの3章を通して、教会で仕える霊的リーダーについて、特にその人物が満たしていなければならない資格を、テモテに教えようとするのです。パウロは言います。「今、教会には、混乱をもたらしている偽りのリーダーたちがいるから、それらの者を黙らして、代わりに、神様と人にとに仕えたいというすばらしい願いを心に与えられた、みことばの基準を満たしたそのような者を、教会の監督として選びなさい。」と。

もう何度もくり返していることですが、教会のリーダーにとって、犠牲を払ってでも喜んで神様の教会を牧していきたいという願いを持っているということは非常に大切なことです。神様がそのような願いを心の内に与えられているのなら、感謝して追い求めることです。でも同時に、願いさえ持っていれば、だれでもその働きにつけるといふふうには教えていませんでした。だれでも願いさえ持っていたら教会の監督になれるとは言わなかったのです。もし願いを持つすべての人をリーダーにしたとすれば、教会がどうなっていくかは分かりますよね？だからこそ、みことばは、教会を守るために霊的リーダーに対して明確な基準を設けていました。そしてこれまでにその基準、具体的には15個の資格を私たちは一つ一つ順番に見てきたのです。

思い出してみてください。一つ目に見たのは、監督は「非難されるところのない」者でなくてはならないということでした。監督はその歩みのうちに、周りから責められるような明らかな罪や問題を見出されない人物であることが求められていました。二つ目に見たのは、監督は「ひとりの妻の夫である」ということでした。監督は自分の妻を心から愛し、夫婦関係や性的なことに関して聖さを保つ人物であるこ

とが求められていました。三つ目に、監督は「自分を制する」者でなくてはなりません。監督は自分の欲求や感情、周りの状況といったものに振り回される者ではなく、自分の心を制することができる人物であることが求められていたのです。四つ目に、ここからは先週見たことですが、監督は「慎み深い」者でなくてはならないということでした。監督は置かれた状況にあって、主に喜ばれることが一体何なのかを正しく考え、みことばから冷静な判断を下せる人物であることが求められていました。そして五つ目に、監督は「品位がある」者でなくてはならないということも見ました。監督はその生き方が、みことばによってきちんと整えられた者であり、人々から信頼や賞賛を受けるような歩みをしていることが求められていたのです。このようにみことばは、教会を導いていくリーダーが、どのような霊的な基準を満たしていなければならないのかをはっきりと教えてくれていました。

でもこれも何度も言っていますが、これらの基準はリーダーだけのものではなく、私たちひとりひとりが自分たちの歩みと照らし合わせることができる鏡のようなものでした。信仰の成熟を目指している私たちが、自分はどの点において弱さを覚えているのか、どの点に於いてますますキリストに似た者と成長することができるのかを確認することができる基準、目標だったのです。だからこそ、一つ一つの資格が、リーダーにとっても非常に重要なものであり、また私たちすべての者にとっても大切なものでした。ですから、きょうも続けて2節から二つの資格を皆さんと一緒に見ていきたいと思います。これでもうやく2節も終わりです。ぜひ、この二つの資格も自分のこととして、ともに考えていきましょう。そしてもし、欠けている部分が自分のうちにはっきりと示されたなら、みことばがそれを教えてくださったことに感謝して、主により頼みながら、目標を目指して成長していきましょう。きょうの内容を実際に見ていきたいと思います。いつものようにまずみことばをお読みします。

#### I テモテ3 : 1-7

「:1 人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。:2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、:3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。:5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——:6 また、信者になったばかりの人であってはけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。:7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

#### ○監督とその資格⑥: よくもてなす 2 f 節

さて、監督の15個の資格として六つ目にパウロが記していたものは、「よくもてなす」ことでした。2節の最後から二つ目にそう書いてありました。「品位があり、よくもてなし、」と。要するに教会を監督する者というのは、「もてなす」ことにおいても「非難されるところのない」人物であることが求められていたのです。

##### 1. 定義

この「よくもてなす」とは、そもそも何を意味しているのでしょうか？このことばは、もともと二つのギリシャ語「愛情や愛を意味することば—フィロス」と「見知らぬ人を意味することば—セノス」から成り立っています。二つのギリシャ語「愛情」や「愛」ということばを表すことばと、「見知らぬ人」を意味するこの二つのことばから成り立っているのです。そしてこれら二つを組み合わせると、「見知らぬ人に対して愛情を示す」といった意味をもつのです。見知らぬ人に対して示す愛情です。自分とは関わりのない見知らぬ人を愛し、喜んでその人の必要を満たそうとすること。これを聖書では、もてなすことだと教えています。ただし、ここで注意してほしいことがあります。もしかすると今の意味を聞いて、もてなすと

というのは自分の知らない人に対してするものなのか、では、自分とは関わりのない人に対して愛を示してさえいればこの基準を満たしていることになる、と考えた方がおられるのであれば、それは違います。

ここで大切なことは、このことばは、私たちが示すべき「愛の範囲」を強調しているということです。言い換えれば、私たちは例外なく、すべての人に愛を示すべきです。でも、その範囲が私たちにとって親しい者にだけでなく、今自分とは関わりのない者に対しても及ぶということを表しているのです。すべての人に対して私たちは愛を示すのです。親しい者に対しても愛を示すのです。でも、よくもてなすというのは、私たちに親しくないような人に対しても愛を示すのだということです。

少し考えてみてください。私たちは自分の家族の者に愛を示そうとします。自分の夫や妻、両親、子どもに対しては喜んで仕えようとするでしょうし、また皆さんは、親しい友人や同僚、親族の者に至るまで色んな助けを与えようとするかもしれません。私たちは関係が近ければ近いほど、親しければ親しいほど、自ら進んで優しさや愛情を示そうとするのです。でもここで問われていることは、そうではない人に対してはどうなのか、自分とは全く関わりのない人に対して、自分とは全く親しくない人に対しては、どのような愛を、どのように振る舞っているのかということです。パウロがここで言わんとしたことは、監督はよくもてなす者でありなさい、ということでした。つまり監督は、すべての人に対して特に見知らぬ人に対して、だれにでも変わらない同じ愛でもって同じように愛を示す者であるかということです。見知らぬ人に対してであっても、親しい人に対してであっても同じ愛を示しているか、仲の良い人に対して示すのと同じような態度で、時には犠牲を払って家族や友人の必要を満たそうとするように、自分とは関わりもない親しみもない人に対しても、自ら手を差し伸べ仕えようとするのがここで求められていました。まとめるなら、本来なら、愛やあわれみを示す関係にはない者に対して、自ら進んでその人の必要を満たそうとすること、その人に愛を示そうとすることが「もてなす」ということです。

## 2. 重要性

ここで少し立ち止まってよく考えてみてください。パウロはこの資格を、長老が身に付けていなければならない条件の一つとして挙げていたのですが、それは一体どうしてだったのでしょうか？一体なぜ、教会のリーダーはただ聖書を学んでいればいい、教会のリーダーはみことばを学んで人々を教えるだけで十分だ、とは言われなかったのでしょうか？どうしてももてなすということが教会の監督にとって欠かせないものだったのでしょうか？

それは、この「もてなす」という行為が、その人の心の内にあるものを明らかにするからでした。このことを正しく理解するためには、この時代の社会の様子を覚えている必要があります。ですから、この時代の様子を想像してみてください。この当時、町には今の私たちがもっている快適なホテルや旅館はありません。旅行者が気軽に泊まれるような場所はなかったのです。むしろ、この当時の宿事情は劣悪なものとして、人々の間で認知されていました。その様子をウィリアム・パークレイ師はこのように描写しています。「古代世界において、旅館事情はすこぶる悪かった。アリストファネスの劇中で、ヘラクレスが今夜はどこに泊まるのかと仲間になぞねると、「のみが一番少ないところさ」という答えが返ってくる。プラトンは旅館の主人のことを客を人質にして身代金を要求する海賊のような存在だと語っている。旅館は汚くて高く、とりわけ墮落したものになりがちであった。」「アリストファネス…古代ギリシャ最大の喜劇作家」と。旅行者にとって町の宿というのは、到底からだを休められるような場所ではありませんでした。安全ではなかったのです。だからこそ、訪れた町に知り合いがひとりもいなければ旅行者は宿に泊まるのではなくて、広場で寝泊まりをしたのです。そして、これは当時のクリスチャンにも当てはまることでした。皆さんもよくご存知のパウロもそうでしたが、この時代、教会には、色んな地方に出て行って町々を巡ってみことばや福音を宣べ伝える教師や伝道者と言われる人たちが数多くいました。またそれ以外にも、クリスチャンであるがゆえに迫害を受け、家を持たずに逃げ回っているような貧しく弱っている者たちもたくさんいました。そんな者たちが町にやってきたときに、何よりも彼らは、もてなしを

必要としていたのです。だからこそ、教会に与えられた一つの大きな責任は、彼らを家に招いて世話をすることでした。そしてその責任を一番に負っていたのが、教会のリーダー、群の模範となるべき監督だったのです

監督は、たとえ見知らぬ人であったとしても、必要を覚えている者たちを進んで家に招き、彼らにあわれみを示すことが求められていました。家を解放したのです。アレクサンダー・ストラウクという先生は、その重要性についてこう表現しています。「もてなすことは、クリスチャンの愛と（神の）家族として生きることの具体的なしるしです。…家を開放することは心を開いていること、また愛のこもった、犠牲的で、仕える精神を持っていることの表れであり、もてなす心が欠けているのは自己中心的で、死んだ、愛のないキリストへの信仰の表れなのです。」と。こうして監督は、知らない会ったこともないような人に対して、心を開いて喜んで仕えることが必要とされていました。

でも少し皆さん考えてみてください。これは簡単なことではないですよ。この当時、多くの教会のリーダーは金銭的にも物質的にも決して裕福な者ではありませんでした。家庭に客人を招いてもてなしをするということは、大きな犠牲を伴うことだったのです。ましてや、客人として招いている人物は自分にとって親しいなじみのある者ではなく、関わりを持ったことがないような人でした。どう思います？他の人に恵みを施す余裕は自分の家にはない、全く知らない兄弟たちを招いて食事のもてなしをすることは大変だ、そんなことをする余裕はない、自分の家庭に重荷になってしまうと、そう考えてもおかしくなかったのです。簡単ではない非常に難しいことが監督には求められていました。

でも、だからこそ、この「もてなす」という行為は、その人の心の内にあるものを明らかにするものだったのです。もっと言えば、その人の心の内にある愛を明らかにするものでした。その人がどんな愛を持っているのかは、もてなすことを通して判断することができたのです。どういうことかと言えば、自分の持ち物や快適さというものを愛するのか、それとも神様を愛し、たとえ犠牲を払ってでも喜んで人にあわれみを示そうとするのか、どんな愛を、どちらの愛を持っているのかが監督には問われていたのです。

### 3. 適応

でも皆さん、この資格もこれまでと同じです。みことばは監督にだけでなく、すべてのクリスチャンに、よくもてなすということを求めていました。例えば、初代教会のことを思い出せば、彼らはまさにそのような歩みをしていたのです。使徒2：42-47には、「：42 そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。：43 そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって、多くの不思議としるしが行われた。：44 信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。：45 そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。：46 そして毎日、心をつにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、：47 神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」と書いています。これが初代教会のクリスチャンたちの歩みでした。またペテロもテモテで使われていたこの同じことばを用いて、I ペテロ4：9でこのように語っています。「つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。」またヘブルの著者もヘブル13：16で「善を行うことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。」と記しています。互いの必要を補い合うということの大切さを、みことばはくり返し訴えていました。

ですから、この基準は確かに監督にとって非常に大切なものです。でもこの基準はリーダーだけのものではありませんでした。本来なら、愛や愛情やあわれみを示すに値しないような関係の者に対して、私たちみなに、自ら進んで犠牲を払うこと、必要を満たそうとすることが求められていたのです。これが私たちひとりひとりに神様から与えられた教えでした。例えば、家を解放してだれかを招き食事を振る舞うこともその一つです。確かにここに書かれていることもその一つです。でもそれだけがもてなすことではありません。今、私たちが見ているこの「もてなす」ということばのポイントは一体何かわかります

か？それは、私たちがたとえどんな犠牲を払うことになったとしても、他の人の抱えている必要を喜んで満たそうとすることかということ。それが求められていました。その人の信仰の成長になることであるなら、どのようなことでも自ら進んで助けを与えようとするのです。それが「もてなす」ということでした。さらに言えば、先ほども言いましたが、この「もてなす」ということが、私たちがどんな愛を心にもっているのかを明らかにするのです。私たちがだれかに助けを与えようとするときに、私たちはチャレンジがあります。どんなチャレンジかといえば、自分のことを優先するのか、その相手のことを優先するのかです。自分のことを優先するのか、神様のことを優先するのかです。自分の持ち物や快適さを愛するのか、それとも神様と人を愛し、犠牲を払ってでもあわれみを示そうとすることかということかです。

そうだとすれば、私たちのきょうの歩みは、よくもてなす者としての歩みでしょうか？自分自身の歩みを振り返ってみてよく考えてみてください。今皆さんが周りに示しているその愛は一体どんな愛でしょうか？皆さんが示している愛は、親しい者に対する愛と親しくない関係のないような人に対する愛とは同じでしょうか？それともそこには大きな違いがあるのでしょうか？私たちにとって、私たちに関心を払って愛してくれる人を愛するという事は比較的簡単なことです。でもそのことに関してイエス様はこのように言われました。ルカ6：32-36にこう書いてあります。「：32 自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、自分を愛する者を愛しています。：33 自分に良いことをしてくれる者に良いことをしたからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、同じことをしています。：34 返してもらうつもりに人に貸してやったからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。貸した分を取り返すつもりなら、罪人たちでさえ、罪人たちに貸しています。：35 ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。：36 あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」

イエス様はここで何を言わんとしておられたのでしょうか？ポイントは明白です。もし私たちが自分を愛してくれる人だけを愛しているのだとすれば、それはこの世の人と何ら変わらないということです。自分を愛してくれる人を愛するのは救われていない人にもできる、ということです。でも、あまり親しくない人や自分と合わない人、自分を傷つけるような人を愛することには難しさが伴います。でも、それができるのだと。キリストの助けが必要ですが、そのキリストの助けを得れば、私たちはそれができます。

皆さん、私たちはキリストがあのかの十字架の上で明らかにしてくださった神様の愛を知っています。この方の愛は、私たちが敵として歩んでいたときに、キリストご自身が自ら進んで犠牲を払って示してくださったものでした。私たちが何よりも必要としていたものを主はご存知であり、その罪の赦しというものを、主は完全に与えてくださったのです。それが私たちにとって必要なものでした。そしてそれだけではなく、この方のうちにある者は、もう二度と罪に定められることはないのだと、そのようなすばらしい約束をも与えてくださったのです。本来であれば、そのような愛には値しない私たちに対して、主が喜んで進んで愛を注いでくださいました。だとすれば、その愛を私たちは互いの間で実践しているのでしょうか？

先ほども皆さんに言いましたが、もてなすことにおけるチャレンジは、私たちが何を一番に愛しているかということです。皆さん少しピリピに戻っていただいてピリピ3章を見てください。ピリピ3：7-8にこう書いていました。パウロは「：7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。：8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。」パウロもかつて愛しているものがありました。でも、キリストを知った

ときに、そのかつて愛していたものすべて、これらは価値がない、キリストを知っていることが一番すばらしいことだとわかったのです。キリストが一番だから、私の持っているものよりもキリストが一番、だから犠牲を払って私は兄弟姉妹に仕えよう、未信者たちに福音を伝えようと働いていました。

私たちに問われていることも同じです。もし皆さんの中でこの主のすばらしさを知らない方がおられるなら、この主のすばらしさを知ってください。この方は私たちのために主イエス・キリストを送ってくださり、あの十字架の上で代わりに死んでくださり、神の怒りを耐え忍んでくださり、そして死なれただけではなく、三日目によみがえって勝利者として天に上られたお方です。この方を信じる者には罪の赦しがある、との約束を与えてくださいました。だからこの方のもとに来ることです。この方の前に罪を悔い改めて、この方を主として救い主として歩いていくことです。この方の愛を、この方がいかにすばらしさを私たちが知っていなければ、このような愛を実践することはできません。

また、私たちは周りの者に喜んで自分のものをささげて、仕えようとしているのでしょうか？それとも自分のものを手放そうとはせず、それに心が囚われていないのでしょうか？私たちは色々なかたちで、もてなすことができます。ここで監督にも求められていたように、家を開放して人を招くということも一つのもてなしのかたちですが、霊的に落ち込んでいる兄弟姉妹に対して、メッセージや手紙を送ったりすることも、教会に新しく来た人たちを歓迎したりすることも、他にも色々なことをすることができます。それがどのような方法であったとしても、必要を抱えている者の益となるならば、自ら進んで愛を示そうとしているかどうかが問われています。私たちの愛は果たして周りの者にどんなふう映っているのでしょうか？この世の者と全く変わらないものなのでしょうか？それとも主を知らない人には理解することのできない、キリストに根ざした愛でしょうか？これが六つ目にパウロが挙げた監督の資格「よくもてなす」ことでした。教会のリーダーは本来であれば、愛、あわれみを示すような関係には値しない者に対して、自ら進んでその人の必要を満たすことが求められていたのです。そしてリーダーだけではなく、私たちひとりひとりにとっても同じことを実践していくことが、同じことにおいて成長していくことが求められていました。

## **○監督とその資格⑦：教える能力がある 2g 節**

### **1. 定義**

次に監督の資格として七つ目にパウロが記していたもの、それは「教える能力がある」ということでした。3：2節の一番最後に「よくもてなし、教える能力があり、」と書いています。教会を監督する者は教えることにおいても「非難されるところのない」人物であることが求められていたのです。では、この「教える能力がある」という資格にはどんな意味が含まれているのでしょうか？この「教える能力がある」ということばは、「教えることにおいて熟練している」とか「知識を明確に伝える能力がある」といったことを意味しています。つまり簡潔に言うと、監督はみことばの知識をわかりやすく人々に教えることができる者であること、真理を上手に伝達することができる、そのような能力を持つ人物であることが求められていました。

ここで皆さんに注目してほしいのは、この「教える」という資格が、この箇所では挙げられている他の資格と少し異なるものだということです。ちょっと思い返してみてください。もうすでに私たちはいくつかの資格を学んできましたが、パウロはそこで繰り返し、監督はこのような特徴を持った人でなくてはならないと教えていましたね。「非難されるところがない」者でありなさいとか、「自分を制する」ことができる者でありなさいとか、「品位がある」ことを求めていたのです。それらはどれをとっても監督としての品性を問われていたのです。言い換えれば、霊的リーダーにとって何よりも求められていた大切だったことは、どんなことをその人物ができるかよりも、どのような歩みをしているかでした。そのことをくり返し求められていたのです。しかしパウロはここで初めて、監督は人に教えることができる賜物を持った人でなければならないと、「能力」を強調していました。もちろんこれは、教える能力があれば、

あとは何をしてもいい、どんなに乱れた歩みをしていてもよい、という話をしているのではないことは皆さんよくご存知です。監督は群の模範であるからこそ、語ることや振る舞いにおいても全ての面で、非難されるところのない歩みをするのが求められます。しかしここでパウロは、「教える能力がある」という資格を挙げることによって、監督がみことばをわかりやすく人に伝えることができる人物であること、その能力をもっていることがこの仕事には重要だ、と強く訴えていたのです。霊的リーダーにとってことばを巧みに用いて、みことばの真理をはっきりと人々に教えることができるということは、欠かすことのできないものでした。

さてここまで聞いてこられて、このように考えたり、考えられたことがある方がおられるかもしれません。監督にとってみことばを教えることが大切だということはよく分かりました。では具体的に人を教えるというのはどういうことを指すのでしょうか？監督が人を教えるというのは、講壇から説教をすることを指しているのでしょうか？みんなの前でメッセージを語るができるということが、監督になるための絶対条件なのでしょうか？と。答えは、そうとは言えません。確かに霊的リーダーにとって、聖書の真理を人々の前で教えるということは非常に大切な役目です。しかしそれは何も、すべての監督が同じように講壇からみことばを語るということを求めているわけではありませんでした。

では、監督が教えることができるというのは、実際どのようなことを指し示しているのでしょうか？このことを深く理解する上で、テトスの中でパウロはよりわかりやすく私たちにそれを教えてくれています。テトス1：9を見ていただくと、そこにもテモテと同じように、教会の監督の条件が列挙されているのですが、その中でこう言っています。「教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。それは健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができるためです。」このように監督の条件として記されていたのです。

ここで特に「教える」ということに関して監督の二つの責任が言われていました。一つは、信頼すべきみことばを守って「健全な教えをもって人々を励ます」ことでした。そしてもう一つは、同じそのみことばでもって「反対する人を正す」ということでした。ですから、「教える」というのはかたちがどうであれ、正しく歩もうとする人をみことばから励まし、誤った教えをする人をみことばによって警告し、戒めるということを意味しているのです。正しく歩もうとしている者たちを、みことばから励ましたり、みことばから教え続けていくこと、また誤った考えをする者たちを、みことばから戒めたり、注意したり、警告したりすることを言っています。そしてそれはもちろん、このように公の場や講壇からなすこともできますし、それ以外にもさまざまな学びの場や個人的な交わりの中にあってもそのことをなすことができます。思い返してみれば、パウロはまさしくそのことを実践する者でした。パウロは使徒20：20－21で「20 益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。 人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、」と記されています。パウロは人々の前でも、また家々でも教えようとしていたのです。

パウロがこの責任を負ってこのように働いていたように、すべての霊的リーダーは同じ責任を負っています。みことばをわかりやすく教えること、伝えることを通して、敵から羊を守って羊を正しく導いていくことが求められているのです。このことはパウロだけではありませんでした。テモテにおいても同じだったのです。最初に歴史的背景を振り返りましたが、エペソの町に残されたテモテの責任もそうでした。彼も教会に入り込んできた偽りの教えをする者たちの口を封じて、間違った教えで混乱している者たちを励ますという責任を負っていたのです。どのようにしてその責任を果たすのか？それはもちろん、みことばの真理によってでした。

## 2. 適応

監督にとって真理をわかりやすく教えることができるということは、羊を導いていく上で必要不可欠なもの、非常に大切なものになるのです。教会はリーダーたちがみことばを忠実に語ることによって整えられていくのです。

でも、この資格も実はこれまでと同じように、リーダーだけではなく、皆さんひとりひとりにも言えることだということです。これはもちろん皆さん全員がいつか教師になるとか、皆さん全員がいつか長老になるという話をしてはいただけません。教会全体を教えるという働きをするのは、教会に与えられた長老のなすべき働きです。だからこそ、皆さんはこの先、公の場でみことばを教えることはないかもしれませんが、私たちがみことばを見るとそこに書かれているのは、私たちがお互いの間でみことばの真理を教え合うことが大切だということです。私たちにはお互いの間で、みことばの真理をもって励ましを与えたり、時には戒めを与えるようなことが責任として与えられているということです。みことばはそのように教えていました。例えば、パウロもローマ15：14で「私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。」また、コロサイ3：16では「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」と記しています。パウロはくり返し、私たちがお互いにみことばを用いて教えあったり、戒めあったりすることを求めています。それが信仰者にとって、信仰生活に与えられた大切な役割だったのです。

だとすれば皆さん、私たちはそのような歩みを、今、しているでしょうか？私たちは互いの間で真理を語り合っているでしょうか？みことばから人々に励ましを与えることもそうですが、時には、間違っていることをしている人、罪の中に陥っている人がいるなら、みことばからそれを正したり戒めたりしているでしょうか？

私たちは正直、時にこの真理を教え合うということにおいて難しさを感じてしまうことがあります。励ますことはできるかもしれませんが、でも、正すことにおいては特に難しさを感じてしまったりするでしょう。問題は、どうすればこの点において私たちが成長することができるかということです。

### ●真理を語る者として成長するための三つの秘訣

最後に、真理を語る者として成長していくために大切な三つの秘訣を皆さんと見てみたいと思います。

#### a) ことばのもつ力を覚えること

私たちが互いの間で真理を教え合う者として成長するためにどんなことが大切なのか、まず一つ目に言えることは、「ことばのもつ力を覚えていること」です。私たちはことばのもつ力を覚えることが大切になります。言い換えれば、私たちは自分の発することばというのが、周りの人にどれほど大きな影響を与えるものなのかということを、いつも心に留めておくことが大切だということです。ヤコブはこんなことばを残していました。ヤコブ3：2「私たちがみな、多くの点で失敗をする者です。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。」と。ヤコブが何を言わんとしていたのかは、皆さんひとりひとりがよくわかっておられると思います。私たちは色んな点で失敗します。でも、ことばによって失敗することが多くあるのです。私たちが何気なく発したことば、私たちが思いやりや愛のないことばを発すること、私たちが怒りに任せて発したそのような色々なことばで、周りの者を悲しませたり、傷つけたり、苦しめたりしてしまうこと、皆さんも必ず一度は経験されているはずです。また逆に、私たちはだれかのことばによって思い悩まされたこともあると思います。私たちのことばというものは、確かに人に喜びをもたらしたり、慰めを与えたり、励ましを与えたりすることができる素晴らしいものである一方、人の心を打ち砕いたり、引き裂くことができるそんな恐ろしい力をもったものでもあることを私たちはよく知っています。だからこそ、真理を教える者として成長するためには、まず、自分のことばというものが非常に大きな力を持っている、ということに気をつけている必要があります。自分の発することばに注意を払っている必要があるのです。でもこれはもちろん、私たちが



注意を払っていて、何もせずに自分のことばに気をつけていればいい、そうすれば問題を解決できるという、そんな話ではありません。かつて私自身も、ことばで失敗したときにこう思ったことがあります。あー、もう自分がことばで失敗したくないからとりあえず口を閉じておこう、とりあえず黙っておこう、とりあえず黙っておけば問題を引き起こさないで済むだろうと。皆さんはありますか？でもその結果どうなります？そうやって私たちが心に決めていたとしても、忘れた頃にまた、ことばで失敗してしまうのです。どうしてだと思いませんか？それは、ことばを生み出す心の部分が変わっていないからです。ことばを生み出す心の部分が変わっていないから、同じことを繰り返すのです。イエス様もこのように言われました。ルカ6：45「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」と。イエス様が教えていることは明白です。それは、私たちが話す「ことば」というものは、私たち自身の心の状態を表している、ということです。

考えてみてください。私たちがことばで失敗してしまったそんな時に、どのようにその失敗を捉えているのでしょうか？どんなことを考えているのでしょうか？真っ先に周りの人や状況といったものを責めないのでしょうか？あの人があんなことをしなければ自分は間違わなかったのに、このような状況の中では仕方がなかったと考えないのでしょうか？もしそのように考えているのであれば、先ほどイエス様が言われたことばによく耳を傾けてください。「人の口は、心に満ちているものを話す」と。ことばで失敗するような周りの環境が確かにあったかもしれません。でもそれらは、あなたの心に満ちているものをあらわにしたに過ぎないのです。

#### **b) みことばを学び、心に蓄えること**

だからこそ、真理を語る者として成長するためには、ことばのもつ力というものを覚えているだけではなくて、二つ目に「みことばを学んで心に蓄える」ということが求められるのです。私たちの心を変えることができるそのお方であるキリストや、真理のみことばに、私たちは心を満たし続けることです。私たちがみことばを見るときに、私たちはキリストがどのようなお方なのか、どんなに素晴らしいことを成し遂げてくださったのか、どんな約束を持っているのか、どんな希望を私たちは持っているのか…そういったことをみことばを通して学ぶことができます。そのようにして私たちはみことばを学んで成長していくのです。だとすれば、そのみことばを何よりも愛し、学んで心に蓄え、そしてそれを実践して生きていくことです。いつもみことばの真理に心を支配させることです。詩篇の著者も言っていました。詩篇119：97「どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょうか。これが一日中、私の思いとなっています。」この著者にとって神様のみことばは、愛するものでした。だからいつも一日中、そこに思いを置いていたのです。果たして私たち自身は、このような同じ熱心さをもってみことばを学び、いつもそれに思いを巡らせているのでしょうか？私たちが真理を語る者、真理を教える者として成長する上で、みことばを心に蓄えているということは非常に大切なことです。

#### **c) 愛を動機として真理を教えること**

そして最後三つ目のこととして挙げられるのは、「愛を動機として真理を教える」ということです。今見てきたように、まず私たちは、自分たちのことばが非常に大きな影響をもつものであるということを知っていることもそうですし、覚えているからこそ、私たちの心のみことばで満たしていることもそうです。そのようにみことばを心に満たすことによって、私たちは成長していくのです。またもし、私たちが語るべき真理というものを、そもそも知らなかったとすれば、真理を語る者には到底なりません。私たちがみことばを知らなければ、真理を語ることはできません。私たちは、みことばが大切だからみことばを心に蓄えていこうとするのですが、同時に、もし私たちがただ知識だけを蓄え、愛を忘れてしまうのであれば、それも大きな問題です。パウロはIコリント13：1-2で「:1 たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。:2 また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていて

も、愛がないなら、何の値打ちもありません。」と言っていました。言い換えれば、「私たちが、どんなことばで話そうとも、どんなに知識を持っていたとしても、どんなに完全な信仰を持っていたとしても、愛がないのであれば、それら全てが何の価値もない虚しいものだ」ということです。だから皆さん、私たちひとりひとは、自分がどのように歩んでいるのかということをよく吟味することが大切です。私たちの話していることばは、まずみことばの真理に沿ったものでしょうか？真理をいつも心に蓄えて真理を妥協することなく歩む、そのような歩みでしょうか？また同時に、私たちのことばは、キリストの愛を反映させるようなものでしょうか？真理も愛もどちらが欠けてもいけません。どちらも私たちに大切なのです。私たちはひとりひとり、愛をもって真理を互いに教え合う者として成長していくことが求められています。私たちはそのような者として、今を歩んでいるのでしょうか？これが七つ目にパウロが挙げた監督の資格「教える能力がある」ということでした。

教会のリーダーは、みことばをわかりやすく伝えることを通して、敵から羊を守り、また羊を正しく導いていくことが求められていたのです。監督にとって、みことばを教える能力があるということは非常に大切なものでした。

でも、教えるということに関しては、私たちひとりひとりにも当てはまるものです。私たちは互いの中で、真理を、愛を持って教え合うということが、みことばから求められていました。

## 〇まとめ

さて、きょう私たちは、監督の資格の六つ目と七つ目をともに考えてきました。改めてどうだったでしょうか？パウロは、霊的リーダーは「よくもてなす」者であることを求めていました。監督は、本来なら、愛やあわれみを示すような関係にはない者、見知らぬ者に対して、自ら進んで犠牲を払って必要を満たすことが求められていました。またパウロは同時に、霊的リーダーが「教える能力がある」者であることも大切だと言っていました。監督はみことばをわかりやすく伝えることを通して、敵から羊を守ったり、弱っている羊やさまよっている羊を正しく導いていくことができる人物であることが大切でした。教会を導くリーダーが満たしていなければならない基準として、これらのものが挙げられていたのです。

でも同時に、これらの基準はただリーダーにだけ与えられたものではありませんでした。私たちひとりひとりも目指していくべき目標だったのです。キリストに似た者へと変わりたいと願う者たちが目標にするべき、霊的に成熟した者の姿が、まさにここに記されていました。

このように一つ一つの資格を見ていくと、確かに私たちのうちには、足りない部分や成長しなければならぬ部分がたくさん見えてくると思います。でもそれが見えてきたときに、私たちは同時に感謝することができるのです。なぜなら、かつて私たちは、キリストに似た者に変わりたいなどの思いを、微塵も持っていませんでした。私たちは罪の中に死んでいたのです。私たちには希望などありませんでした。でもその私たちが、今は、罪と死に対し勝利されたその主とともに歩んで、いつかこのキリストにお会いするという約束、その希望をもって歩み続けていくことができるのです。そのような希望が与えられているのであれば、キリストのすばらしさというものが何よりも自分にとって重要なものだ知っているのだとすれば、あのパウロがそうであったように、ただひたすら前を見て、神の栄冠をいただくその日まで、私たち自身も目標を目指してともに成長していきましょう。